

潰瘍性大腸炎に胃風湯など工夫

Q 二十五歳、男性。三年前、潰瘍（かいよう）性大腸炎との診断を受け、ステロイド剤やサラゾピリンという抗炎症剤の投与を受けています。薬を減らすと再発し入退院を繰り返しています。

ているのが柴苓湯（さいれいとう）である。局所の炎症を抑えるために活動期には黄連解毒湯（おうれんげどくとう）を併用するとよい。

A 潰瘍性大腸炎は完全に治すことがなかなか難しい疾患の一つである。大腸の炎症で出血や粘液便、腹痛などが主な症状であるが、複雑な免疫機構の異常があることがわかっていて、ステロイド剤や抗炎症剤が効いても減量すると再発したり、ステロイド剤の副作用に悩んでいる方は少なくない。

そこで一つはステロイド剤の減量や廃止のために種々の漢方薬が用いられている。頻用され

もう一つは免疫異常を根本的に治すために漢方薬が試みられている。温清飲（うんせいいん）を基礎にした処方や十全大補湯（じゅうぜんたいほとう）、黄耆建中湯（おうぎけんちゅうとう）などが用いられる。私どもの研究所ではこれらの一般的処方でもうまくいかない時、胃風湯（いふうとう）に甘草（かんそう）を加えたものや、白頭翁加甘草阿膠湯（はくとうおうかんそうあかうとう）などを処方している。

現代医薬品と全身状態を改善する漢方薬を上手に組み合わせ、本来の免疫機構にもどすようにじっくり治すべき疾患である。